舞踊を一要素とした総合芸術への私的試み

葵　妖　子

1．緒　言

創作舞踊に足を踏み入れた当初は，ひたすら他の芸術への従属を否定し，舞踊に於ける主体性の確立を第一目標に置いていた。この主体性とは舞踊家自身の主体性を包含するもので，現在に至るまでこれに力点を置いていた。

しかし，舞踊がその特性上総合化せざるを得ない事情から，作業機構面では舞踊家を頂点としたヒエラルヒー構造形体を有するに至った。この機構自体はいくつかのメリットがあるものの，これとは裏腹に上部構造は絶えず個々の主体性に基づく不満を根ざし，一方，下部構造は夥しく導入された機械技術に置き換えられていったのである。

こうした傾向は舞踊活動を著しく阻害するばかりで無く，芸術の質的向上をも停滞させることになるのではないだろうか？

以上の意味で総合化に於ける不均衡性に疑問を抱きはじめた頃，この機構形態の一部解体は，偶然・即興等の追求を目的とすることが契機となって始められた。これは演劇・音楽・舞踊等に於いて試みられたわけであるが，総合芸術としてはなおいくつかの問題が残された。わけても，芸術に於ける個人性と総合芸術との矛盾は解決を見ぬままに終った。

本研究に於いては，下部構造をも含め，芸術のジャンルを越えた視野から，この問題に着手した次第である。

2．問題提起

芸術作業の個人性は，ルネッサンス以降の特質の一つともされ，偉大な英雄時代が記されている。しかし創作に於ける個人という系は熟考したとき，全く閉されたものでもなく，時間経過として捉えるとある時点で想定的客観性の介入を含んでいる。即ち，ある意味では自から開系を拒絶していないことを示唆している。この顕著な例が舞踊など舞台芸術に於ける演の行為を有するものである。

したがって，ここでは場の理論を導入することによって諸々の芸術の統一を図り，参加作家各人の表現を要素とする有機的相互作用によって，芸術現象を生み出すことも可能ではないであろうかという命題に取り組むに至った。

3．研究方法

ここでの研究課題は，先に提起した問題を解決する過程を通じて，芸術としての舞踊の真の主体性を確立することである。

今回は最初の試みであり，研究方法としては従来の公演過程を踏襲しながら，さらに問題点を絞って行くことにした。

実験に当っては，個々の作家の創作領域を必要以上に侵すこと無く，且つ，円滑な相互作用を起さしめる為に，作業に於いて以下の規準を設けるとともに，以下の方法を構じた。

作業規準
1．参加各人の創作目的を“場を創る”という観念で統一した。
2．現象場の変動に指向性を与える為，各人共通の創作指標を置いた。
3．構成過程は，マーカータイムによって分節化した。
4．構成分節は均等に振り分け，介入時の準位を定めた。
5．相互作用は，通常要素内で行うことにした。

作業方法
1．各人は創から演に至る作業を一貫して担当した。
2．対象（現象場）把握の為の準備段階として，（注）1に示すプログラムにより討論を重ねた。
3．的確な適応，且つ，偶然性の介入を可能な限り押える等の為に表現の構造を対称化した。
4．表現の一部をシグナルとして使用した。

作業過程は，速記，形態記述，撮影，録音，自己観察によって記録し，実験を考察した。（注）2・3は公開事前に定まった会場及び構成のプランである。

尚，実験は四つの分野が参加し，約6ヶ月の期間を当てた。

4．研究結果及び結言

こうした実験では測定に明確性を欠くことは当然であるが，総合観察の結果，現象場の変動が軌道をはづしているか又は望ましい加速がつかない状態のときは，必ずと云ってよい程，場のすい込み現象又ははね返し現象が測定された。

場の変動形態は，丁度車輪が回転しながら進んでいるようなもので，すい込み現象が起っているときは，相互作用が成立しているものの，場に流されて要素の制御が働かない状態で，相互作用としては低次元のものであった。またはね返し現象が起きているときは，要素の介入にタイミングがずれ，連鎖作用が行なわれないものであった。

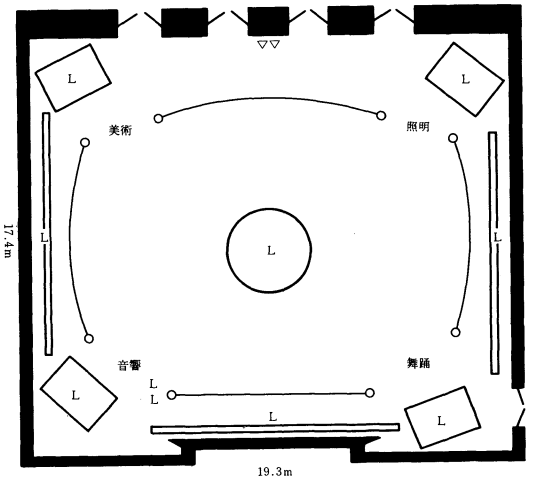
これ等の問題は，対象の把握，適応技術及び対象と自己との制御能につきるであろう。したがって，

参加各人の創作領域を侵犯すること無く適切な情報交換を行えば，誤り少ない想定（予想を含む）をなさしめると考えられ，このようにプログラムする必要があると考察された。

次に今回は場を統一基準に置いているが，実践上の方法論に於いてはまだまだこれが曖昧であり，従来の時間概念を安易に場の構成に置き換える等，随所に混乱が見られ，これは各ジャンルに於いて，個々の特長を改めて厳密に検討，分折することが必要であると推察された。

(注)2. 会 場 プ ラ ン

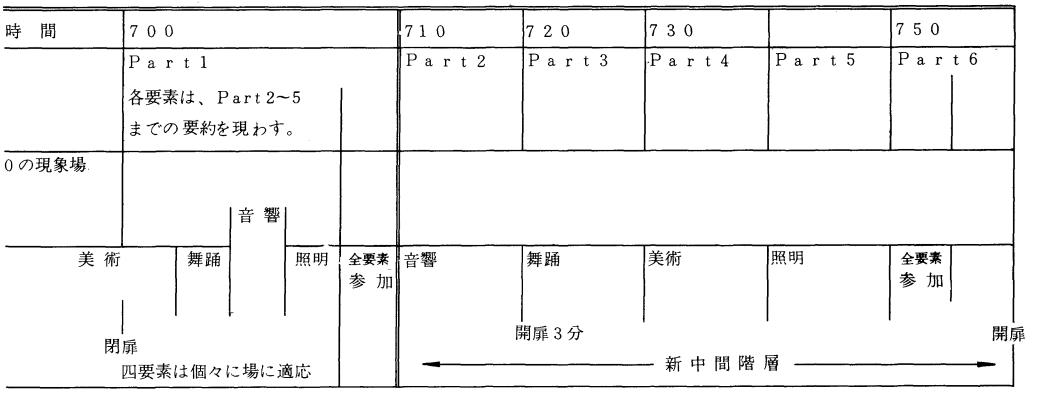
▽▽　マーカータイム
○ ○　オブザーバー席
L　照明機具



最後に，要素としての舞踊面から考察すると，舞踊の芸術に於ける対他ジャンルの問題は，否応無く舞踊自体の限界を露呈させる結果となる。したがって，現時代に於いては舞踊創作の上で表現要求の複雑性が絡み合い，他の芸術への依存，転化をせざるを得ない事実となっている。

しかし，この限界を明確に押えて置かなければ，従来そのまま従属的位置づけに甘んじざるを得ない結果と危惧するものであり，今しばらくは効果性を削除した中で舞踊考察を進める所存である。

（注）１．討議経過

１／23	各分野の相互理解を目的とした討論。（会場視察）
２／20	既成条件の検討 ex. 物理的条件 or 記号限界 etc.
４／10	指標〔新中間階層〕に関する討論
27	全体構成と各表現との係わり方（１），構成モデルのシステム化
５／４	全体構成と各表現との係わり方（２），シグナルの決定
22	最終会場プラン決定。シグナルのみ交互に実演
〃	PM7.00　公開実演

(注) 3. 構 成 プ ラ ン